

もう11月が目睫に迫っています（もうすぐと言う意味）が、受験勉強の方はいかがでしょうか。疲れ果てているなら、『高校3年生』という昭和の歌でも聞いて頭を休めてください。

さて、この通信ではキリスト教や哲学について書いていく予定ですが、その前に「宗教とは何か」という問題をはっきりさせておきたいと思います。



もう20年くらい以前のことですが、『日本人はなぜ無宗教なのか』（ちくま新書）という本が出ました。著者は阿満利磨（あまとしまろ）という神主かつ大学教授で、日本人の多くは自分が無宗教だと言うが、決して宗教に関心を持っていないわけではないということを主張しています。その証拠として、毎年正月には1億人近い人が初詣に行くこと、近親者が亡くなれば葬儀をすること、お盆には故郷に帰って墓参りをするなど、などを挙げています。

著者は宗教を「創唱宗教」と「自然宗教」に分けて理解することを勧めます。創唱宗教とは、「特定の人物が特定の教義を唱えてそれを信じる人がいる宗教」で、「自然宗教」とは「いつ、だれによって始められたかもわからない自然発生的な宗教で、無意識に先祖たちによって受け継がれ、今に続いた宗教」というものです。そして、日本人の「無宗教」とは神仏を信じない無神論ではなく、多くは自然宗教を信じている状態なのだというのです。

この著者の分析がどこまで正しいのかは私にはわかりませんが、なるほどと思ったことは、宗教からは縁遠いように見える現代の日本の社会にも、少し落ち着いて見ると宗教の現れがいろんなところで見付かるということです。

このことは、カトリック教会が「人間は生まれつき宗教的だ」ということを裏付けていると言えます。カトリックでは「宗教とは神に対する人の道です」と定義します。もしそうなら、宗教には神という概念が不可欠になりますが、ここでいう「神」とは、必ずしもキリスト教の言う「唯一全能の神」というようなはっきりした輪郭のある神でなくてもかまいません。漠然と「何かこの見える世界の裏にあり、この見える世界と関係をもつ存在」というくらいでも十分です。

つまり、人間は自分の目で見て、手で触ることのできる世界だけを知って満足できない。人間というものは、この目の前にある世界を超越する存在がある、つまり世界の裏に何かがあって、それがこの世界に影響を与えているのではないか、また人間の死を越えたところに何かがあるのではないかと考える存在だということです。この世界を超越した存在、死の向こうにある存在について、頭で考えていこうとするのが哲学だとすれば、理屈ではなく自分の直感かまたは誰か偉大な賢者の主張を通じて、何かを信じようとするのが宗教と言っても良いかもしれません。

19世紀以降、自然科学がめざましい進歩を遂げ、今も発展し続けていることをみんなはよく知っていることでしょう。19世紀にはこの自然科学の発展を見て、近い将来、神や死後の謎も自然科学が解き明かすようになり、その暁には宗教は消滅すると考えた人も少なくなかった。たとえば、マルクスは「人間の精神的な活動（宗教はその最たるもの）は、生産構造（経済の制度？）によって決まるので、労働者だけの階級のない社会ができると宗教は消滅する」と言っていました。ところが、多くの人の血を流してこの理想の社会を建設しようとしたソ連をはじめとする共産党一党独裁の国々でも宗教は消滅せず、ロシアでは、ソ連が崩壊してからロシア正教が力強く復興しています。

私たち日本でも、似たようなことが言えます。21世紀になっても「占い」や「運勢判断」（金談、縁談、失せ物判断、だまって座ればぴたりと当たる）に興味を持つ人がいるということは不思議だと

思いませんか。それも人間が宗教的動物だという定義が間違っていないことを示しているでしょう。私たち日本人も信じやすい人間なのです。

ともかく、科学が素晴らしい発展を遂げたにもかかわらず、大半の予想を覆して、宗教はますます盛んになっている（宗教が盛んになるのが良いのか悪いのかは別です）のです。なぜでしょう。それは自然科学が人間の直面する人生の謎を解くことができないからです。

どうして解くことができないか。自然科学の対象は、計測が可能な物質を持つ存在だけだからです。しかし、人生の問題（何のために生きているか、なぜ生まれてきたのかなど）を考えるには、「苦しみ」とか「価値」とか「目的」とかいった物質ではないことを考えないと埒が明かない。だから、いかに自然科学が進歩しても、宗教や哲学が不要にならないのです。

ところで、宗教とは神やあの世についての教えです。これらの問題は、いかに生きるかということと密接に関わっています。それで「宗教は怖い」面があるのです。自然科学系の科目（いわゆる理科）や数学を勉強しても、自分の生き方について考えたり決心をたてたりすることはないでしょう（もちろん、こういう科目に心酔して、その研究に人生を捧げようとする人はあるかも知れません。が、それは三平方の定理やエネルギー不滅の法則に影響を受けたからではなく、その学問が追求する真理の美しさに惹かれたからです）。ところが、宗教や哲学は、それに興味をもって近づく人の思想に影響を与えます。

「つまり、宗教は怖いから近づくなと、いうことか」と言われれば、もちろんそうではありません。私が言いたいのは、まずその宗教が何を教えているかを冷静に調べて欲しいということです。

人間は宗教的な動物だということは、人が何かを信じることなしに生きていくことは不可能とも言えると思います。「宗教はアヘンだ」と言って、宗教は絶滅させねばならないとしたマルクス主義も、実は科学的な結論ではありません。ある意味でマルクス主義はマルクスという教祖が創設した宗教で、マルクス主義者はそれを信じている信者と言えます（これは私の友人の共産党に關係の深い人が言っていました。多くの共産党員はそれを認めないでしょうが）。

ところで、「何かを信じて生きるのは、弱い人間のすることだ。僕は強い人になりたいので自分だけ信じて生きていく」という人もいます。私はその気概に敬意を表したいです。しかし、人間が弱者だということは否定できないと思います。この現実を無視して生きるなら、いつか大きな挫折を味わうことになるかと危惧します。

大きな会社の重役だったが定年を前にして「定年後も今の部下は私を敬ってくるのか」と心配していた人、健康だったのに何かの病気を発見し突然元気を失った人、普通に元気に仕事をしていたが信頼していた人に裏切られて何もかもやる気を失った人に会ったことがあります。そのたびに人間とは普段は強いように見えても、ちょっとしたことで自分の弱さを痛感することは珍しくないと思知らされました。私はその人たちが弱いと言って笑うような勇氣はありません。自分も全く同じようになり得ると確信しています。だから、まず自分の弱さを認めること恥ずかしいことではない。その上で、何が信じられるのかを考えるのです。

みんなは今は普通に健康で普通に勉強（仕事）ができ、普通に暮らしているので問題はないでしょうが、いつか深刻な人生の問題に遭遇して悩むことがあるかも知れません。そのとき、自分はしっかりした土台の上に生きていると考えるか、逆に足下が揺らいで何にもすすることができないと考えるかは大きな違いです。キリスト教は私たちが安定した土台の上にいることを教えます。けれどそれはどのように説明するのか。それを少し紹介できたらと思います。